吉崎御坊跡（史跡指定調書）

武藤正典

吉崎御坊跡は、本願寺第八世蓮如が、文明三年（一四七一）六月から同七年八月に至る約四年間、本願寺北陸布教の拠点として坊舎を構えた旧跡である。

蓮如が、父存如より本願寺継職後、比叡山延暦寺の僧兵のため、京都の大谷坊舎が破却され、近江に難を避けたが、この地も安住地ではなく、父祖以来の有縁地、北陸の風景絶佳の要害地吉崎山上に布教の基地をつくったのは文明三年で、当時、吉崎は、奈良興福寺大乗院領河口荘細呂宣郷下方に属し、地形的には、北、西、南の三方は北潟湖に囲まれ、東方は加越両国境に連亘する山脈が近傍に迫り、蓮如が坊舎を建立した「御山」は絶壁の、北潟湖に臨む丘陵地帯である。

蓮如が北陸本願寺教団の拠点として吉崎を選んだ理由には、越前守護職朝倉敏景が蓮如に帰依し、この地を提供したとする説と、荘園領主であった大乗院経覚と蓮如が親交があったとする二説がある。

近年、朝倉敏景帰依説は、蓮如の吉崎来住の越前国支配者は、甲斐、堀江氏等で、朝倉氏が甲斐氏に代って支配権を確立したのは、文明四年八月で、朝倉氏寄進説は根拠が薄い。

「大乗院寺社雑事記」・「経覚私要鈔」には、蓮如と経覚との関係が深く、また「寺社雑事記」文正元年七月一日の条に、河口荘内吉崎は、越前本願寺教団の中心本覚寺が細呂木宣郷の別当寺と記し、蓮如の吉崎地選定の理由は、大乗院経覚、あるいは本覚寺との関係を重視すべきで、蓮如が吉崎退去後、本覚寺が、吉崎留守代表の地位を与えられている点等、蓮如の吉崎誘致に大きな役割を果たしたことを物語っている。

また、吉崎は交通上要害地で、各地の門徒等の参集に便利で、当時は、府中（武生

）より日野川を利用し北ノ庄（福井）に至り、さらに足羽川、九頭竜川で三国港を経て吉崎に至り、また、大聖寺川より加賀に入る北陸交通の要衝に位置していたことも蓮如の吉崎選定の一因であった。

現在、吉崎山「御山」から地形的には、南東方にかけ春日山付近まで大部分は水田化したが、大正年間までは、北潟湖が深く湾入し、北方は樹陰うっ蒼とした、鹿島の森（天然記念物石川県）の美観が、今日なお、蓮如当時の面影を伝えている。御山の東方に向っては、比較的陵傾斜地で、この辺を中心に他屋が建立されていたと推定され、現在、ここから山上を通って吉崎小学校々庭に通じる小路が残り、ここが蓮如「遺文」の馬場大路の位置に当る。浜坂浦の上手より春日山は要害地で堀を築き、「延宝年間の絵図」には、御山の周囲には土塁が描かれていて現在もその痕跡が僅かに残っている。

蓮如時代に築いたこの土塁は、延宝五年頃まで残っていたようで、東西両本願寺論争の際、この地に注目した徳川幕府は、土塁を切り崩し、堀を埋めたと「御用諸式目録」にある。なお蓮如は、吉崎退去後も、山科、大阪に本願寺を構えた際、何れも土塁、堀の防塞的寺院の配慮を保ち、越前でも、現在、藤島超勝寺には、寺防塞の土塁が現存している。

蓮如自身の意図は如何にせよ、本願寺教団の主軸は農民層で、封建権力者の攻撃対象になり易かった結果、城塞的寺院の性格を持つことは当然で、要害の地形を充分活用し防備に万全を図った吉崎御坊は、日本史上類例のない農民の城郭的性格を持っていた点は否定できない。こうした重要性を持つ土塁の破却を徳川幕府が断行したのも当然といえよう。

御山の下の字南北、西屋敷の地は、昔漁家、商家のあった地帯と伝え、蓮如時代作成、後世、江戸時代、延宝年間模写した「吉崎御旧跡絵図」には「御山」を中心に多屋出、出口、石堀場、経塚、正庵等の字名があるが、これを現在の位置に比定すれば他屋の位置等もある程度知ることができる。

また、南、北大門の位置は、文明五年八月二日付の「蓮如遺文」には、一四二棟の門前町と発展し、諸国参詣人のため、「他屋」と呼ぶ宿坊ま建立したことが知れる。

蓮如在住当時の吉崎御坊跡の規模は不明だが、文明六年一月二〇日付、「蓮如遺文」には、本坊に本尊ならびに親鸞絵像を安置していたとある。延宝年間「御山」をめぐって、東、西両本願寺間の論争の際、製作された絵図にも本堂の規模は、四間四面の礎石の残存を記し、江戸時代、仮堂を建立したため、礎石の位置は多少動かされたようだが、大体現在地点附近で、現在九個の礎石が現存し、これが「延宝五年山上一件公訴江戸御坊日記」にある本坊跡の所在地であろう。

また、絵図に「五本松」とあるのは、文化七年成立「蓮如上人御旧跡絵鈔」の、蓮如手植の「御花松」とあるのに該当し、現在は枯木化し根幹部を残している。なお、この記の「御腰掛石」は、当時の庭石と推定され、昭和初年、山上に建立された蓮如銅像の礎石にしたといわれる。蓮如の娘で吉崎で死亡した見玉尼の墓跡を「御墓松」

と記し、現在は、卵塔（球形）が建立されている。

文明六年三月二十八日夕刻、南大門付近、他屋から出火、北大門まで延焼し、九棟の他屋が焼失したが、この際本坊も焼失したことが、「文明六年四月八日付蓮如遺文」にある。その後、本坊、他屋は再建復旧したが、翌文明七年春頃から、加越両国にわたる戦国動乱と加賀一向一揆との対決体勢に入り、加賀国守護、富樫政親の勢力余波が、吉崎本願寺にも及び、蓮如自身も持病が北国の寒気に悪く苦しんでいたところ、文明七年（一四七五）八月二一日に、朝倉経景（つねかげ、敏景の弟）、平泉寺衆徒等が吉崎坊の下間安芸を討ち取るため夜討ちをかけ他屋等に火を放ったため、蓮如は身の危険を感じ、吉崎退去の止むなきに至ったものである。戦国時代成立の「蓮如尊師行状記」には、蓮如は吉崎山の背後「七曲り」より、乗船退出したとあって、これが現在御山の南方部の湖辺にあるポンプ小屋へ降る小路に当る。

以上、吉崎御坊跡（御山）は、文明七年（一四七五）蓮如の退去後廃寺となり、何等の造築もなく蓮如の夢を秘めたまま、約四〇〇年間の今日まで滅びたままの姿で残った「中世廃寺跡」で、一六世紀後半における本願寺教団の持つ立地条件、諸性格を知る貴重な遺跡として、史跡指定地域としての価値は高いと、認められる。

参考文献

一、資料

「蓮如遺文」（御文章）（御文）
文明五年八月　二日付
同　一二日付
同　二二日付
同　九月　日付
同　一〇月　三日付
同　一〇月　日付
同　一二月　日付
文明六年正月二〇日付
四月　八日付
七年五月　七日付
年号未詳五月一〇日蓮如書状
（本覚寺あて）
〃　一一月一八日付
〃　〃　〃
「大乗院寺社雑事記」
文正　元年　七月　一日条
文明　四年　八月一七日条
同　二八日条
文明一一年一二月一八日条
一三年　九月二四日条
同　一〇月　六日条
一七年一〇月一〇日条
「経覚私要鈔」所収細呂宣郷下方引付
応仁元年―文明四年条　（内閣文庫所蔵）
「徳了袖日記」　（真宗全書所収）
「蓮如上人御旧跡絵鈔」（　〃　）
「蓮如尊師行状記」（　〃　）
「真宗懐古鈔」（　〃　）
「拾塵記」　（戊午叢書）
「御用諸式目録」
（福井県立図書館松平文庫）
「延宝五年山上一件公訴江戸御坊日記写」
（金津町吉崎大谷派願慶寺所蔵）
「寅永五年吉崎絵図」
（金津町吉崎和田耕栄氏所蔵）

武藤　吉崎御坊跡

「延宝五年、吉崎絵図」三枚
（本願寺（東西）並に福井藩作成各一枚
福井県立図書館松平文庫）
「弘化三年、吉崎絵図」
（金津町吉崎大谷派願慶寺所蔵）
「吉崎旧跡絵図」
（滋賀県犬上郡多賀町保月、照西寺）

二、著書、論文

大類伸編
「若狭及び越前に於ける奈良朝後の主なる史跡」（大正一〇年福井県内務部発行）

長沼賢海著
「日本宗教史の研究」
（昭和三年東京教育研究会）

上田三平著
「越前及び若狭地方の史蹟」
（昭和八年東京三秀舎）

伊藤義賢著
「蓮如上人真蹟古写本正信偈訳釈集」
（昭和九年山口県竹下学寮出版）

笠原一男著
「真宗教団開展史」
（昭和一七年東京畝傍書房）

牧野信之助著
（武家時代社会の研究」
（昭和一八年東京刀江書院）

本願寺史編纂
「本願寺史」第一巻
（昭和三六年京都真宗本願寺派宗務所）

三浦周行著
「法然と蓮如」
（仏教史学二の一〇）

谷下一夢著
「蓮如上人吉崎点拠について」
（歴史地理六二―四）

釜田弘文著
「蓮如上人の吉崎滞在と加越門徒」
（大谷学報一七の四）

（福井県文化財専門調査員）